

石川県七尾美術館だより

平成18年1月6日発行
編集・発行 石川県七尾美術館

第44号(冬号)



ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM

彫刻家・田中太郎展 ～院展初入選から絶作まで～

「迦陵頻伽」木彫彩色
昭和63年 第84回太平洋美術会展



展覧会紹介

平成18年1月6日(金) ~ 4月16日(日)
 休館日については裏表紙をご覧ください

「彫刻家・田中太郎展」

「院展初入選から絶作まで」

《前期》1月6日(金) ~ 2月19日(日)
 《後期》2月25日(土) ~ 4月16日(日)
 「前期後期で一部展示替えあり」

◇第二展示室

田中太郎は明治四十四年(一九一一)、七尾市に生まれ、院展を中心に活躍した彫刻家です。寺院建築の装飾彫刻を学んだ後、上京して平櫛田中に師事し、昭和十一年(一九三六)には再興日本美術院展初入選を果たします。以降も同展や太平洋美術会展などに出品、受賞を重ねる一方、法隆寺金堂雲斗・雲肘木の復元にも従事し、文化財保存にも尽力したことで知られています。

平成四年(一九九二)に千葉県我孫子市で逝去された折、ご遺族より二七点のご寄附を受け、平成七年に開館記念シリーズ展「精神性の追究―田中太郎の世界」を開催しました。また、平成十六年には新たに五点のご寄附をいただき、まさに初入選作品から絶作までが一堂に揃いました。今回はそれを受け、「人物の表情」「不思議な動物・神仏」「色んなポーズ」「その他」の四つのテーマで、木彫・ブロンズ・石膏・版画作品など三十七点を展示し、改めて氏の偉業を紹介します。氏の作品には写真による具象表現作品と、半抽象的で精神性の強い作品があります。その両面をゆつくりとお楽しみください。



「烏」木彫彩色 1936年
 第23回院展初入選

「人物の表情」

師の平櫛田中を制作した「閑日」、横山大観をモデルにした「S老の顔」と「横山大観像」は、「阿吽」を表したといえます。また、郷里を同じくする長谷川等伯には格別の思い入れがありました。氏がよく知る人物から、作者の中にある強いイメージまで、様々な「顔」をご覧ください。



「等伯頭像」ブロンズ 1991年

「不思議な動物・神仏」

氏の作品には、木彫による半抽象的な作品が多く、それらは人間と昆虫が組み合わさった様な不思議な動物として表現されています。氏の精神性

が強く打ち出された不思議な動物や神仏の世界が私たちを惹きつけます。



「蛭の光」木彫 1949年
 第34回院展日本美術院賞白寿賞

「色んなポーズ」

ゆるぎない母性で子どもたちを包み込む「母子群像」。マニラの名所川下りをする舟頭が、観光客を待つ力強い姿。人々の日常的で自然なポーズから、仕事の一瞬の姿をとらえた作品まで、その表現は尽きることはありません。



「母子群像」木彫 1985年
 第81回太平洋美術会展奨励賞

◇観覧料

	一般	個人	団体
大高生	2800円	3500円	2800円

※中学生以下無料・団体は二十名以上です。
 ※「春の名品展」と共通料金です。

「春の名品展《前期》」

～人物画の魅力～

1月6日(金)～2月19日(日)

◆第一展示室

当館所蔵品及び寄託作品より人物をモチーフとした絵画作品を展示します。

古来より、人々は最も身近で、最も魅力的な存在として人物を描いてきました。描かれるのは行き交う人々や、仲間に家族、自画像と様々です。

「人物画」と聞いて、肖像画を思い浮かべる人は多いでしょう。人物画に代表される肖像画は、富の象徴として人物画の重要を高めました。また自画像は、最も安上りのモデルで、最も内面を表現できるモチーフでもありました。

具象作品において、画家の筆は単なる肖像画として人物の形態を忠実に写しとるだけでなく、その内面までも描きだします。



「赤いチュチュ」 寺井重三

また一方、象徴的に形態を大きく変化させ、かろうじて人物のフォルムをとどめるものもあります。人物画は人物そのものだけでなく、その人物を取り巻く時代や社会の背景をも描き出すため、そこには、ときに作者自身や対面する私たちまでも

が映し出されています。

様々に表現された、人物画の世界をお楽しみください。

特別展示 長谷川信春(等伯) 筆「陳希夷睡図」



「窓」 前田さなみ

「春の名品展《後期》」

～茶道美術品を中心に～

2月25日(土)～4月16日(日)

◆第一展示室

十六世紀中頃に成立した「茶の湯」は、日本の陶芸に画期的な変化をもたらしました。村田珠光(一四二三～一五〇二)らにより、それまでの「唐物」を最高とする価値観を脱却して唐物以外から名品を見出すことが流行、備前や信楽などの「和物」が徐々に使用される様になりました。やがて武野紹鷗(一五〇二～一五五五)の頃になると、茶人たちが自分の好みで道具を注文し、各地の窯では盛んに茶陶の生産が行われました。

そして千利休(一五二二～九二)によって「茶の湯」が大成され、古田織部(一五四四～一六一五)、小堀遠州(一五七九～一六四七)と続く

「茶の湯」の流れの中で、茶陶に対する需要がますます高まると、陶工たちは自由な発想と豊かな創意力を以って、変化に富んだ様々な焼物を大量に制作しています。

特に古田織部の影響を受けたと考えられている各種の茶陶は、作為的な造形で一際存在感を放っています。その織部好みといわれる焼物のひとつが織部です。

織部は美濃国(現在の岐阜県美濃地方)で制作された焼物で、黄瀬戸、瀬戸黒、志野と併せて「美濃焼」と総称されます。中でも織部は「美濃焼」の集大成とされ、奔放な造形と奇抜な意匠によって茶道具や食器などを大量に生産、戦国の世を生き抜いた武将たちや様々な階層の人々の豪胆さ、自由闊達さをそのまま写し込んだ様な作風で、現在に至っても桃山という時代の息吹を私たちに伝えてくれます。

当館所蔵品の中核「池田コレクション」には、コレクションを蒐集した池田文夫氏(一九〇七～八七)が岐阜県美濃地方を拠点にしていたこともあり、織部や志野などの優れた作品が多く含まれています。

そこで本展では「池田コレクション」より、織部の色々な器などを含めた形で、茶道美術品を紹介いたします。



「織部蓮絵茶碗」



「織部手付水注」

※観覧料は「彫刻家・田中太郎展」と共通料金です。

市民ギャラリー 展覧会案内

第26回 二科会写真部石川支部公募展七尾展

1月27日(金)～29日(日)
但し、最終日は午後4時まで

石川県のプロ・アマ写真家から作品を公募し、二科会員の朝日正・土田貴夫両先生の公開審査を経た、入賞・入選全作品を展示します。ご鑑賞下さい。

入場料 無料

主催 二科会写真部石川支部

連絡先 小此内茂樹 ☎〇七六七(五七)二四三三

第10回 洋画展NOTO

3月29日(水)～4月2日(日)
但し、最終日は午後4時まで

第10回NOTO展記念展です。世代会派を超えた充実した作品群を御覧下さい。最高潮を迎えた本年でフィナーレです。光彩輝く5日間を逃さないように。乞御期待。

入場料 無料

主催 洋画展NOTO

連絡先 大地 統 ☎〇七六七(五三)〇二〇七

アートホール催し物案内

中能登音楽団演奏会～中能登即興アンサンブル～

3月26日(日) 開演 午後2時

中能登を拠点に活動するフレッシュな吹奏楽グループ「中能登音楽団」の金管セクションによるコンサートです。ソロやアンサンブルによる素晴らしい、また愉快的演奏をお楽しみ下さい。

入場料 無料(但し、プログラム代 一〇〇円)

主催 中能登音楽団

連絡先 塚林賢一 ☎〇九〇(五七五三)七四三三

当館主催の催し・アートホール

◇映画上映会◇(入場無料)

1月14日・3月4日(土) 午後2時

「シリーズ いしかわの文化財」彫刻・書画・典籍編

《文化財からのメッセージ》(21分)

第6回 石川県七尾美術館

友の会鑑賞の旅を終えて

今年には合併間もない「白山市の美術館、博物館を巡る旅」を企画し、石川県ふれあい昆虫館、白山比咩神社宝物館、市立松任中川一政記念美術館、松任ふるさと館などを見学してきました。

十一月二十日(日)、晩秋の晴天のもと、十七名の参加者と私も美術館職員三名を乗せたバスは定刻の八時に七尾美術館を出発。道中、見学施設についての説明や画家中川一政について、当館学芸員より説明。山々の頂きがうすらすらと雪化粧をし、その下に紅葉が広がる白山麓(旧鶴米町)へと分け入ります。

予定時刻の九時三十分、「石川県ふれあい昆虫館」に到着。入口の大きなクワガタ虫の模型の前で、参加者全員での記念撮影をして館内へ。同館の吉村専門員から昆虫の特性や飼育裏話を聞いたあと、順路に沿って館内を見学。一番の見所である大温室「チヨウの園」では八〇〇匹のチヨウが飛び交い、ヘアムースなどの匂いに誘われて一羽が参加者の頭に止まると次々に仲間が集まる光景はまさに楽園でした。ガラス張りの展示室からは秋の日が差す紅葉の山々が見渡



◀白山比咩神社にて

され、印象的でした。続いて「白山比咩神社」に到着。ちょうど七五三の時期で、境内は多くの親子連れで賑わっていました。拝殿前で河合権禰宜から白山比咩神社についての説明を受けた後、宝物館館内を見学。重要文化財の狛犬はじめ展示物や白山信仰に関わる丁寧な解説を受けました。

「そば処さかい」にて昼食をとり、午後、一路松任駅前の中川一政記念美術館へ。

石川県にゆかりが深く、九十七歳の長寿であった中川一政の画風はあまりにも有名です。柏野美雪館長より美術館建設までの経緯や作家、作品について説明を受けた後、館内を自由観覧。一同独特の奥ゆかしい画風に見入っていました。

道路を挟み、「白山市松任ふるさと館」に移動。同館は金融、米穀、倉庫業で活躍した吉田茂平氏の私邸を移築したもの。大正・昭和初期にタイムスリップしたような大きな和風建築と小散歩ができる広い庭園が駅前にあることが大変印象的でした。鉄道基地のある松任駅らしく、駅前にはD51型蒸気機関車が一台静態保存されており、古き良き時代がより一層偲ばれました。

最後に「白山市立松任博物館」を訪問。同館の山下学芸員の解説を受けながら常設、企画展示室を見学。常設展示室には七尾美術館にも所蔵品がある隅谷正峯氏の刀剣のほか、刀鍛冶のジオラマ展示に全員が目を見張りました。企画展示では白山や植物、民俗を撮影した数多くの写真が展示され、興味深く観賞することができました。

見学施設が五箇所と少々欲張りな旅行でしたが、二月の合併で県内一番の面積となった白山市のスケールの大きさと歴史、風土を堪能できたと思います。参加された皆様、ご協力有難うございました。

参加者大募集！ 友の会美術講座
石膏デッサン 一日講座
〜木炭で描く〜

絵画の基本ともいえる『石膏デッサン』。二度、挑戦してみたいと思っっているけどなかなか…。「何をどんな風にしたら良いの？」という方にぜひ参加していただきたいのがこの講座です。石膏像をモチーフに、当館職員がやさしく石膏デッサンの実践指導をいたします。

展示会の鑑賞もできて、仕上がった作品はもちろん、使用した木炭なども持ち帰ることができま

日 時…平成十八年二月五日(日)

午後一時三十分〜(二時間三十分程度)

場 所…第三展示室特設会場

指 導…加地 求(当館職員)

対 象…原則として成人。初心者歓迎!

定 員…一〇名(定員に達し次第締切)

参加費…九〇〇円(材料費・観覧会観覧料込)

持ち物…①友の会会員以外の方は一、〇〇〇円
②エプロンまたは汚れてもよい上着
③一〇センチ四方の布きれ四〜五枚

※木綿素材のような布が最適です。

(「持参できない場合は事前にご連絡下さい」)

内 容…まず「春の名品展〜人物画の魅力〜」を鑑賞しながら人物の描写方法について学びます。その後は実践編として石膏像をモチーフに木炭でデッサンをします。

募 集…平成十八年一月六日(金)より電話にて申込み受けをします。

七尾美術館 ☎〇七六七(五三三) 一五〇〇

「ふゆのあそび」に参加ください。

等伯コーナー

国宝・松林図屏風 長谷川等伯展 特別講演会報告②

「松林図屏風の魅力」スライド編

講師 松原茂氏(東京国立博物館上席研究員)

「松林図」屏風は今見ると違和感のないのですが、等伯の時代には類例のない絵でした。それを確認していきます。

松は古くから日本にあり、『万葉集』や『古今集』をはじめ歌集や詩集に松を詠んだものがたくさんあつて、当時の貴族にも庶民にも身近な木でした。まず、大和絵の松から見ていきます。ここでいう大和絵とは、平安時代に中国の唐から入ってきた絵画技法が日本でアレンジされ、日本の風物を描くようになった。その伝統を引いたものと考えてください。

これは「扇面法華経冊子」というものです。大阪の四天王寺に伝わる国宝で、絵の上に『法華経』の文字が書いてあります。お公卿さんと召し使いが寝殿の簀子の所で話をしていて、庭にある松を描いています。

これは、安徳天皇のものと伝えられる厳島神社の檜扇ですが、実際は神さまに供える神宝であるため小さいのだと思います。海岸があつて松が描いてあります。いわゆる「浜松図」の原型だと思えます。

これは神護寺にある「山水屏風」で、「せんずいびょうぶ」と読みます。この作品自体は鎌倉初期の制作ですが、内容的にはそれ以前の大和絵の様式を忠実に伝えるものといわれています。ここにも松が描いてあります。

これが一三〇九年に作られた「春日権現験記絵巻」で、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵です。藤原忠実というお公卿さんの屋敷の庭に植えられた松です。

これは出光美術館にある「四季花木図」屏風で

す。一双の屏風の中に四季を全部織り込んでいます。春の梅、夏の紫陽花と萱草、秋の紅葉、冬は雪をかぶった松です。大きな画面に四季を分配する時は、どうしても冬は片隅に追いやられてしまっています。右は庭の松、左は遠山の自然の松ですね。

これは大阪の金剛寺にある「日月山水図」屏風です。森羅万象を全部取り込んだ屏風で四季が隠されています。これにも先程の遠山の雪をかぶった松、それに浜松が描かれています。この松の根っこの描き方、これが「松林図」に似ています。生き物のように描いてあります。雪をかぶった松は、小さいから当然なんですけれど、筆で一気に描いて、いちいち輪郭を描かないところを覚えておいてください。

そういう中で「浜松図」というのが特に好まれました。住吉とか三保松原とかの名所絵から発展していると思います。これは室町時代にたくさん作られた「浜松図」の代表格のものです。里見家本と呼ばれる本作品は、本当に松林主体の屏風です。

これは文化庁の「浜松図」です。前のと比べると、松の描写が華奢になつていて「松林図」と繋がる描写と思われま

これは竹だけを描いた、メトロポリタン美術館の「四季竹図」屏風です。ここにすみれやタンポポが描いてあつて、この辺は初夏といえますか、ここに絡まる蔦が赤くなつてい

最後に雪で冬を表しています。六曲一双の中に四季の竹を描いているんです。

これは東京国立博物館(以後、東博)の「松図」屏風です。元一

今見てきたのが、等伯以前の大和絵の松の描写です。今度は水墨画を中心とした漢画系の松です。漢画というのは、鎌倉末から室町にかけて中国

から流入してきた宋時代の絵画に倣ったものはいいます。漢画系の松の描写、特に桃山時代のものを見ます。好敵手、狩野永徳の作品です。こちらが京都の聚光院の「花鳥図」襖、こちらは東博の「檜図」屏風です。「檜図」は松ではありませんが、桃山時代の樹木表現というものは、画面を飛び出すような巨木なんです。天地に入りきらないという構成、樹木が好まれました。武将の好みといえるかも知れません。特に松の根っこ、露根です。根上がりの松といえます。地面をわしづかみにするような強調された根っこで、木肌はひび割れたような荒々しい形で描かれています。

これは等伯の若い頃、鼎印が捺してある岡山県妙覚寺の「花鳥図」屏風ですが、この時代にはやはり等伯自身も桃山時代に特徴的な豪壮な樹木を描いています。

これは、京都の智積院の「楓図」です。これやはり天地を突き抜ける大きさです。かなり色が落ちていてこれですから、当時は相当煌びやかだったと思います。こちらは京都金地院の、等伯の「老松図」です。豪壮な松ですね。こういう桃山時代の樹木表現の中に「松林図」を置いた時、非常にかけ離れた感じがするかと思います。

これは「松林図」の露根です。こういう描き方は、むしろ先程の大和絵の「浜松図」屏風にあつたことを思い出していたきたい。しかし、それは大和絵の系統を受けようとして描いたのではない訳で、いろんなものが等伯の栄養になつていて、それらを凝縮して描いたのが「松林図」であると考えてよいと思います。

これは穎川美術館所蔵、能阿弥の「三保松原図」です。能阿弥は、足利將軍の宝物の管理や鑑定をした人ですが、自分自身も絵を描きました。この「三保松原図」は名所絵の水墨画です。松林が続いていて、奥行きのある表現が「松林図」とある程度共通しています。現在六幅ですが、昔はこちらに富士山が描いてあつた、六曲一双の屏風だつ

たと思われまます。屏風全体から見ると、松はこれだけの大きさでしか描いていないんです。「松林図」はもつともつと大きく描いています。

これは伝周文の「四季山水図」です。周文は足利將軍のお抱え絵師ですが、確実な真筆作品は殆ど確認されていないかと思えます。ちよつと「松林図」に似ていますが、これもここに小さく描かれているだけです。

これは京都国立博物館にあります、雪舟の国宝「天橋立図」です。名所絵というか真景図に近いものといえます。しかし、一部実景と左右逆になつていたりしてアレンジされています。この松原の表現は非常に簡略ですが、濃墨、淡墨を使って松の林を表しています。小さいものですが、「松林図」と全く離れたものではありません。等伯自身も遠景の松として、こういう表現をしています。

妙心寺塔頭の隣華院の等伯の襖絵です。葉っぱの描き方は違いますけど、ちよつと「松林図」に似ています。

つまり、水墨画の松の表現で「松林図」と相通ずる作品は、何れも遠景、遠くに描かれています。要するに、ぼんやりして見えないから省略して描いてある訳です。それを手前に引き寄せて描いたのが「松林図」なんです。そのぼんやりしているところを、今度は霧を使った、或いは靄といいますが、そういうものによつてなんともいえない柔らかい松林の雰囲気を表そうとして描いたのが「松林図」だと思えます。

「松林図」は、初めからこの屏風の形に描いたのではなく、元は襖絵、或いは壁貼り付けとして描いたものを、現在の屏風の形にしたという考え方が、研究者の間では常識的になっていきます。しかし、中には初めから屏風だったという説もあり、まだ決着を見ていません。「松林図」の松の表現は、大和絵の長い伝統の中で培われた「浜松図」での表現、それから水墨画の大画面の中で描かれ

ていた山水図の遠景の松を組み合わせ、再構成したのではないでしょうか。

靄、霧という大気の表現を、等伯はどこから学んだのかというと、出てくるのが牧谿という中国の画家です。

雪舟の「秋冬山水図」です。雪舟は非常にがっちりとした構成で、構築的な絵を描きます。この道を辿っていくと奥へ奥へと行き、それで奥に広がる表現をしています。近くは濃い墨で、遠くの山はこんなに薄く、濃淡と構図によつて奥行きを表しています。当時の日本の水墨画家は全部やっています。したが、しかし、靄で奥行きを表す大気の表現は、あまりありませんでした。

これは東博にある等伯の「瀟湘八景図」屏風です。この山水図を見ても、雪舟や周文の絵の技法をそのまま使っています。ここに特に遠近感を表す何かを使っていたと指摘するならば、この金の霞なんです。霞ですから、霧や靄にも繋がるものだと思います。金泥を刷くことによつて、前後関係を表そうとしているんです。この技法を、等伯はうまく使っています。例えば隣華院の襖絵などは、外の障子を通す明りだけで見ますと、この金箔がぼんやりと反射してすぐ遠近感が出ます。そういう金泥の作用を使わないで遠近感を出そうとした、さらに空気を表そうとしたのが「松林図」じゃないかと思えます。

大徳寺の国宝「観音猿鶴図」です。この三幅対を、等伯が大徳寺で見ているのは間違いないと思えます。この猿は「牧谿猿」といいますが、等伯はその猿をいくつかの作品に描いています。鶴も形をそのまま借用していますし、牧谿様を勉強していたことが、『等伯画説』の中からも想定できます。

これは牧谿の「瀟湘八景図」が、それぞれ分断され今別々になっているものです。まず個人蔵の「瀟湘夜雨図」です。こつちが畠山記念館の「煙寺晚鐘図」です。大気が充満しているのが解りま

す。こちらが京都国立博物館の「遠浦帰帆図」です。こちらが出光美術館の「平沙落雁図」です。これは根津美術館の「漁村夕照図」で、ここに陽が差しているのか、空気が靄があるのしか、こういう感じを等伯は学んだのではないかと思えます。『等伯画説』にも、それらしい記事があります。

「松林図」を見ると各グループにまとめられています。一番手前の松を濃い墨で描きます。段々後ろに行くにしたがって、薄墨にしていきます。そういう表現は、先程の「瀟湘八景図」に学んだ空気の表現と、そのものを段々とぼかしていくのとを併用していると思うんです。

京都の相國寺所蔵の「竹林猿猴図」屏風です。ここにある竹の林、ここでも手前のを濃く、奥のものを薄く描くという「松林図」と同じ幹の描き方をしています。これは出光美術館の「竹鶴図」屏風です。こちらにも一隻あります。この竹の表現を見ても、やはりそうです。前にある竹と後ろにある竹を濃淡で表しています。図様的には牧谿の「観音猿鶴図」と同じですから、等伯が同図を学んでいることが解ります。

「松林図」の用筆法を見てみましょう。近くに寄って見ると非常に激しい筆使いであることが、会場に来られた方にはよく解ると思います。こういうところは一回でさっと一気に引いています。藁筆とか竹で作った竹筆で、中には稲の穂につけて描いたのではないかと人もいます。いろいろな実験的なことをしているんですね。こういう激しく一気に筆を使う描き方というのは、龍泉庵の「枯木猿猴図」にも通じるもので、描かれている時期も近いといわれています。

これが牧谿の「観音猿鶴図」の猿です。ただ、こちらは哲学者の様な深く厳しい表情の猿で、等伯の龍泉庵本は子どもをあやしている様な、非常にやさしい猿です。中国画と日本画との絵の本質の違いなのかも知れません。

さて、先程は元襖絵だったという説があると申

上げましたが、当時、屏風や襖の画面は小さな紙を継いでいきます。その継ぎ目というのは、普通継ぎ目の高さが揃っています。「松林図」は、継ぎ目の線が途切れています。それで、紙の継ぎ目が揃うようにずらす、色んな復元案が出ています。左隻の真中のところが、こういう風に繋がるんじゃないかとか。ここが、この横の紙の寸法と考えると、もう少し紙があつたんじゃないかとか：これは平塚市美術館の郡司（宮田）亜也さんが作った復元図です。

これは、カタリリーナ・エツプレヒトさんというスイスの学者が考えて作った復元案です。今より天地がもう少し高くなっています。こういう風に、部屋の角に使っていたのではないかということ。これは、パネル展示している「月夜松林図」屏風です。絵の裏全面に墨が塗ってあり、非常に暗い夜景を表しています。見られるように、明らかに「松林図」を下書きにして描いています。「松林図」が草稿で、こちらが本画という説もありますが、等伯の次の代の人が数十年後に「松林図」を手本に描いたものと考える説が有力です。ということは、「松林図」もそれ以前から今の形になっていたということですね。等伯自身がそうしたのか、周辺の人がしたのかは解りませんが、かなり早い時期にこういう形になったということが解ります。

展示室で、近くから見ると豪快な筆法で、離れて見ると激しさが消えて非常に静かな世界になります。「松林図」は、距離によって見え方が随分違いますので実際に体感してみてください。特に左隻の屏風は右斜めから見ると左から見るのとでは、全然違った景色になります。

さて、初めからあの形で描いたのではないとすれば、今の形そのものが等伯の構想の中から逸脱している部分があるかも知れませんが、とにかく「松林図」が等伯によつて遺されたという事実それ自体が、日本美術史の中でも非常に重大なこと

なのです。今回、この展覧会で地元の七尾に帰られたことを、「松林図」自身も喜んでいてのではないでしようか。

本日は、長時間ありがとうございました。（質疑応答、省略）

★当日は、立ち見はもちろんの事、皆さん舞台真ん前の絨毯の上にも座って聞き入る程の盛況ぶりです、会場中熱気で溢れていました。

松原先生、ありがとうございました。

次回「長谷川等伯展」のお知らせ

「よいよ、腕切りの猿」がやってくる！

「長谷川等伯展」晩年水墨画の名作展

平成18年4月29日（土・祝）～5月28日（日）

【会期中無休】

平成八年度より毎年開催している「長谷川等伯シリーズ展」の第十一回目となります。

今回は「松林図」以降、等伯がどの様に作風を展開していったかに焦点を当て、「枯木猿猴図」（京都市・龍泉庵）、「山水図」襖（京都市・隣華院）、「鳥鷺図」屏風（川村記念美術館）など晩年の水墨画を中心に、若年期の作品と長谷川派の作品を加え、計十五点を紹介する予定です。

特に「枯木猿猴図」（現在二幅）は、元々加賀藩二代藩主前田利長愛蔵の枕屏風の一部で、利長の睡眠中に屏風の猿が手を伸ばして利長の髪を掴んだため、利長がその腕を刀で切り落としたという逸話がある、「腕切りの猿」として有名な作品です。郷里七尾での公開は初めてとなりますので、是非お見逃しなく！



平成18年度 石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される場合は、改めてお申し込み下さい。お申し込みのない場合はそのまま退会となってしまいますのでご注意ください。
郵便振替による受付もできますので、ぜひご利用ください。

入会手続きについて

- (1)年度会費 1,000円
- (2)受付開始 3月1日(水)
- (3)受付場所 当館受付カウンターまたは郵便受付【(6参照)】
- (4)受付時間 午前9時～午後4時30分
- (5)会員証有効期限 平成18年4月1日～平成19年3月31日
- (6)郵便による入会手続き
 - ★郵便振替用紙をご利用ください。(会員証は4月初旬に「石川県七尾美術館だより」とともに郵送します。)
 - ★郵便局備え付けの用紙の通信欄に必要事項《会員の区別(更新・新規・元会員)・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日》をご記入の上、会費を添えて最寄の郵便局窓口へお出し下さい。
 - ★払込料金70円は申込者負担となります。(平成18年4月3日からは100円)

郵便振替口座	00710-0-50795
加入者名	石川県七尾美術館友の会

会員になられますと…

- ◆当館での事業(展覧会、講演会、演奏会など)を掲載した「石川県七尾美術館だより」が郵送されます。(年度内4回発行)
 - ◆当館主催の展覧会観覧料が団体料金に割引されます。(会員本人と同伴者2名まで)
 - ◆「石川県立美術館」「石川県立歴史博物館」「石川県能登島ガラス美術館」「石川県輪島漆芸美術館」「珠洲市立珠洲焼資料館」でも観覧料が割引となります。(会員本人のみ)
 - ◆当館学芸員による特別展の列品解説に参加できます。(会員本人と同伴者2名まで)
- このほかにも当館友の会限定の特別優待(販売グッズの割引など)を予定しています。

News! ☆会員様にお知らせ☆

平成18年度から特別企画展(年度内3回開催:長谷川等伯展、イタリア・ポローニャ国際絵本原画展を含む)の開会式・内覧会に友の会会員様をご招待(無料)いたします。ぜひ、平成18年度も石川県七尾美術館友の会にご入会下さい!

平成18年度 市民ギャラリー&アートホールの使用申し込みについて

当館では個展、グループ展、演奏会など幅広い芸術活動の発表の場として、市民ギャラリー&アートホールの貸室を行っています。平成18年度のご利用は、1月6日(金)から31日(火)までを第1次募集期間として受付いたします。

ご希望使用期間が重複する場合、上記受付期間終了後に調整させていただきます。

展覧会等の関係上、ご利用いただけない期間もございますので、ご利用可能期間につきましてはお問い合わせいただくか、当館ホームページをご覧ください。

また、ご希望の方には詳細を説明したパンフレット「利用のご案内(展示室図面入り)」をお送りいたしますので、お気軽にお申し付けください。

●市民ギャラリー(全6室+通路)●

- ・展示面積(全6室+通路) …… 250㎡
- ・展示壁面延長(最大) …… 137㎡
- ・最大天井高 …… 3.5m
- ※1室(27㎡)から貸室できます。



●アートホール●

- ・面積 …… 315㎡
- ・ステージ幅 …… 8.5m
- ・客席(固定+可動) …… 240席
- ※ピアノ・16ミリ映写機・スライド映写機・OHC等もご利用いただけます。



【お問い合わせ・お申込先】

〒926-0855 石川県七尾市小丸山台1丁目1番地
石川県七尾美術館 貸館係 ☎(0767)53-1500

◎次号・第45号(春号)は4月1日発行予定です。

休館日のお知らせ

- ◆1月 1~5、10、16、23、30
- ◆2月 6、13、20~24、27
- ◆3月 6、13、20、22、27

交通案内

飛行機…能登空港より能登有料道路利用約45分

車…金沢より能登有料道路利用約1時間20分

タクシー…JR七尾駅より約5分

徒歩…JR七尾駅より約20分

市内循環バス…JR七尾駅より西回りに(まりん号)乗車約6分

なおコミュニティバス…JR七尾駅より西コー(ぐるっと7セブン)スに乗車約10分

